

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
340	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>	
<p>Prevalence, correlates, disability, and comorbidity of DSM-IV alcohol abuse and dependence in the United States: results from the National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions.</p> <p>米国の DSMIV 分類によるアルコール乱用および依存症の有病率、関連要因、無能力、罹患率</p>	
<b>執筆者</b>	
Hasin DS, Stinson FS, Ogburn E, Grant BF.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Arch Gen Psychiatry. 2007 Jul;64(7):830-42.	
<b>キーワード</b>	
アルコール乱用、アルコール依存症、有病率、米国	
<b>要旨</b>	
<p>目的：病因の研究や保健事業計画のために疫学的情報は重要である。米国において、飲酒により引き起こされる障害に関する現在の疫学的情報は不足している。米国における DSMIV 分類アルコール乱用および依存症の有病率、関連要因、無能力状態、他の罹病との関連を明らかにする。</p> <p>方法：米国の代表性集団(the 2001 - 2002 National Epidemiologic Survey on Alcohol and Related Conditions (NESARC)の 18 歳以上の男女 43093 人(男性 47.9%、女性 52.08%)(white,70.89%, black 11.07%, Native American 2.12%, Asian 4.36%, Hispanic 11.56%)を対象に the National Institute on Alcohol Abuse and Alcoholism Alcohol Use Disorder and Associated Disabilities Interview Schedule - DSM - IV Version (AUDA - DIS - IV)の質問表を用いて対面面接を行い生涯および 12 ヶ月以内の DSMIV 分類によるアルコール乱用および依存症の診断を行った。アルコール乱用および依存症と社会人口統計学的因子の関連を検討するため多変量ロジスティック回帰によりオッズ比(OR)を求めた。</p> <p>結果：アルコール乱用の生涯および 12 ヶ月以内の有病率は 17.8%と 4.7%であった。アルコール依存症の生涯および 12 ヶ月以内の有病率は 12.5%と 3.8%であった。アルコール依存症は男性、白人、アメリカ先住民族、未婚若年者、低所得者で有病率は顕著に高い。現在のアルコール乱用は男性、白人、未婚若年者に多く、生涯のアルコール乱用は壮年アメリカ先住民族で最も多い。無能力状態はアルコール依存症と強い関連を認めた。アルコール依存症のうち治療を受けたことがあるのは 24.1%であり、10 年前の調査結果より減少している。他の薬物乱用とアルコール乱用は強い関連を認め (OR, 2.0 - 18.7)、他の罹病を考慮しても同様の結果であった。気分変調、不安障害、人格障害もアルコール依存症と強い関連を認めた(OR, 2.1 - 4.8)が、他の罹病を考慮すると関連は減弱した。</p> <p>結論：アルコール乱用および依存症は現在も有病率が高く無能力状態を引き起こしている。アルコール依存症と薬物乱用の共通病因は他の罹病とは異なると考えられる。一方、アルコール依存症と気分変調、不安障害、人格障害の共通病因は互いに共通していると考えられる。アルコール依存症治療率が依然として低いことから社会および専門家の啓蒙努力が必要である。</p>	